≪記紀に隠された史実を探る⑩≫

ヤマト王権の推移・その3　河内王権と倭の五王の真実

～二王統による大王位争奪戦とその終焉～

飯田眞理

【はじめに】前回で述べたことは、およそ以下のようなことである。

①垂仁の後は応神であり、景行・成務・仲哀・神功は非存在である。

②応神とは神功皇后の子ではなく、垂仁の皇子・ホムツワケであった。

③広開土王との戦いの結果、北部九州と朝鮮半島の倭人勢力は河内に東遷することになった。

④伊都国王であった元イザサワケ（仁徳）が元ホムツワケ（応神）と名前の交換をすることを通じて、河内王権を成立させた。

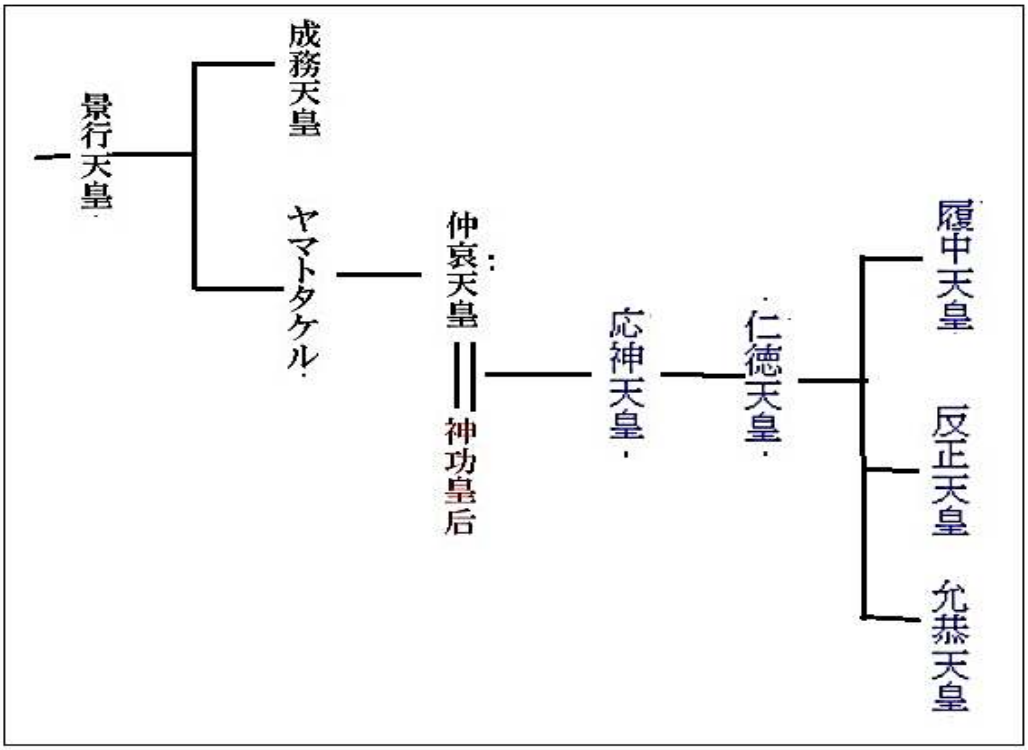
⑤葛城襲津彦は任那の倭人の首長であった。

★今回は、その続きになる。倭の五王について自説を述べるとともに、允恭～雄略時代の2王統による大王位争奪戦とその終焉について述べる。

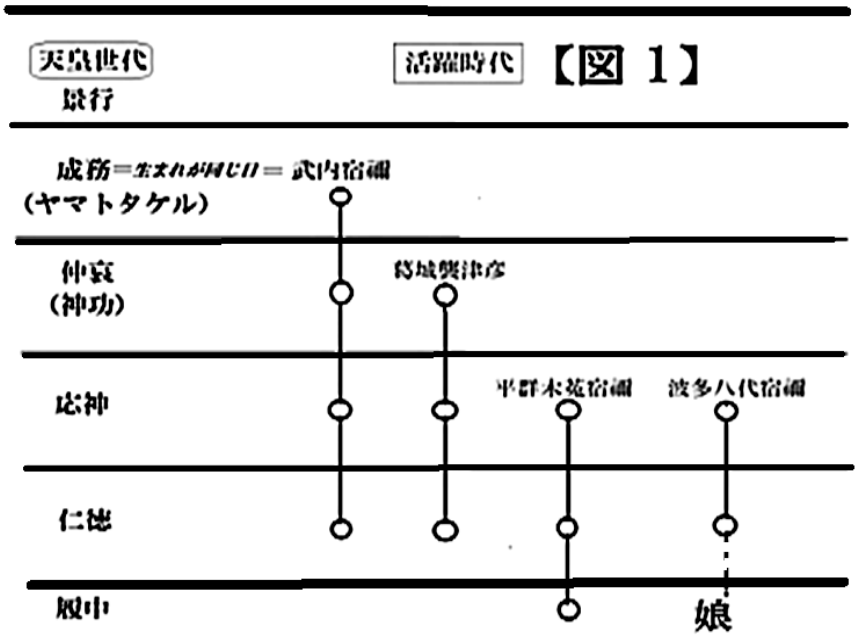
1.　倭の五王と河内王権

(1) 渡来系氏族の事績よりわかる大系譜の真実

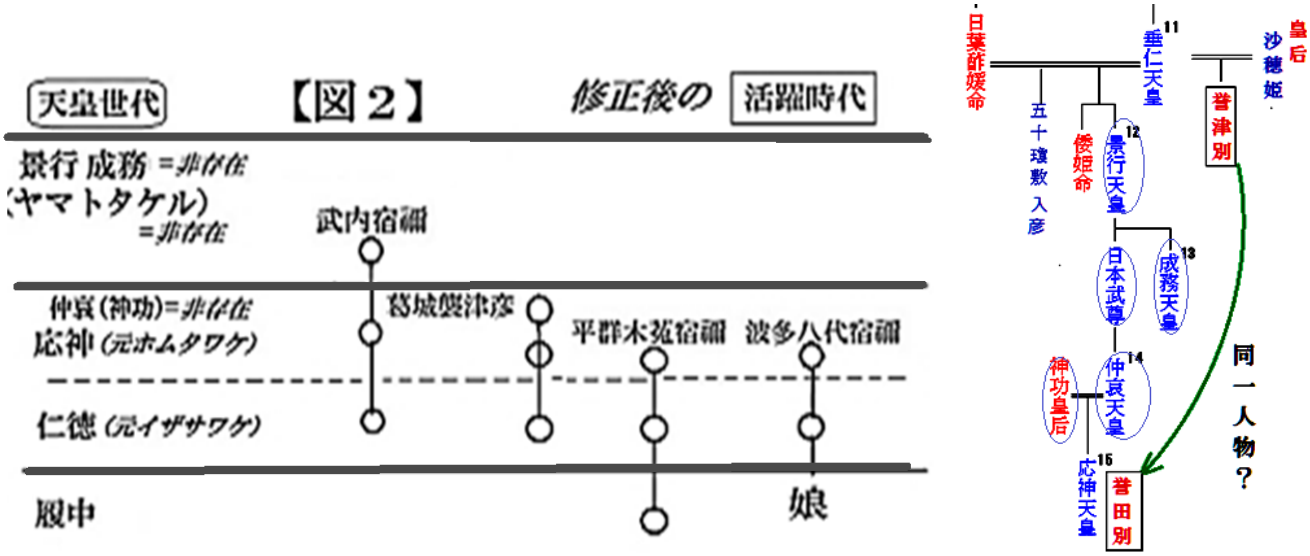
★記紀における大王（天皇）の系譜は下図のようなものである。



しかしながら神功皇后と共に新羅に侵攻して、その後東遷したとされる武内宿禰はなんと四代の天皇紀に記されている。またその子とされる平群木菟宿禰と葛城襲津彦も三代にわたり記されている。それを表にしたものが図１である。



★平群木菟宿禰と葛城襲津彦も三代にわたり活躍している。生まれたときからを考えると、さらに寿命が永くなり、あり得ないことになる。なぜこのようになったか、それは前回に述べたように景行から仲哀・神功は非存在で、仁徳こそが東遷した大王であるからで、さらに応神（元ホムタワケ）と仁徳（元イザサワケ）は親子ではなく、重なっているからである。この筆者の説を元に、描き直すと次の図２になる。



★応神（元ホムタワケ）は仁徳（元イザサワケ）より少し年長であるが、ほぼ同じ世代である。この図では見事に全ての人物の活躍年代が一世代または一世代＋αになり、活躍年代の矛盾が解消されている。

★古事記には、百済の肖古王からの太刀などの献上、阿知吉師などの渡来の記載はあるが、葛城襲津彦などの活躍の記載が全くない。一方、日本書紀には百済関係の記事が詳しく記されていて百済紀を引用した記載もある。おそらく日本書紀編纂のとき亡命百済人がもってきた百済紀などから載せたものだろう。ヤマト王権には伝わっていなかった東遷以前の韓半島での事績を神功紀、応神紀、仁徳紀に配分して記載したと考えられる。

いずれにしても、武内宿禰の子とされるものは伽耶に出自がある首長で、元イザサワケと共に東遷したと推察できる。彼らの代表として武内宿禰という一人の人物を創作して、神功王后の大臣として活躍させたと考えられる。

(2) 倭の五王がわかった！

★次に高校の教科書にも記載されている有名な倭の五王について筆者の説を述べる。

まず中国史書の倭の五王を年代順に箇条書きする。

【413 年】高句麗・倭国など方物を献ずる。（晋書・安帝紀）
倭王讃あり（南史）

【421 年】倭の讃に除授を下賜した。（宋書・武帝紀）

【425 年】倭王讃司馬曹達を遣わし奉表して方物を貢献した。（文帝紀）

【430 年】倭国王が方物を献じた。（文帝紀）

【438 年】讃が死に、弟の珍が立つと、遣使を以て貢献した。
使持節、都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭国王を自称する。上表して正式な除爵を求め、詔を以て安東将軍、倭国王に叙爵した。珍はまた倭隋ら十三人に平西、征虜、冠軍、輔国将軍号の正式な除爵を求め、詔を以てすべて聞き届けた。

【443 年】元嘉二十年（443 年）、倭国王済の遣使が奉じて貢献、再び安東将軍、倭国王とする。

【451 年】使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東将軍に旧来のように加叙し、併せて上る所の二十三人を将軍や郡太守に除した。

【462 年】済が死に、世子の興が遣使を以て貢献してきた。
世祖の大明六年、詔に曰く「倭王の世子の興、奕世（累代）忠を掲げ、外海に藩を作り、王化を受けて境を安寧し、うやうやしく貢職を修め、新たに邊業を嗣ぐ、宜しく爵号を授け、安東将軍、倭国王にすべきなり」

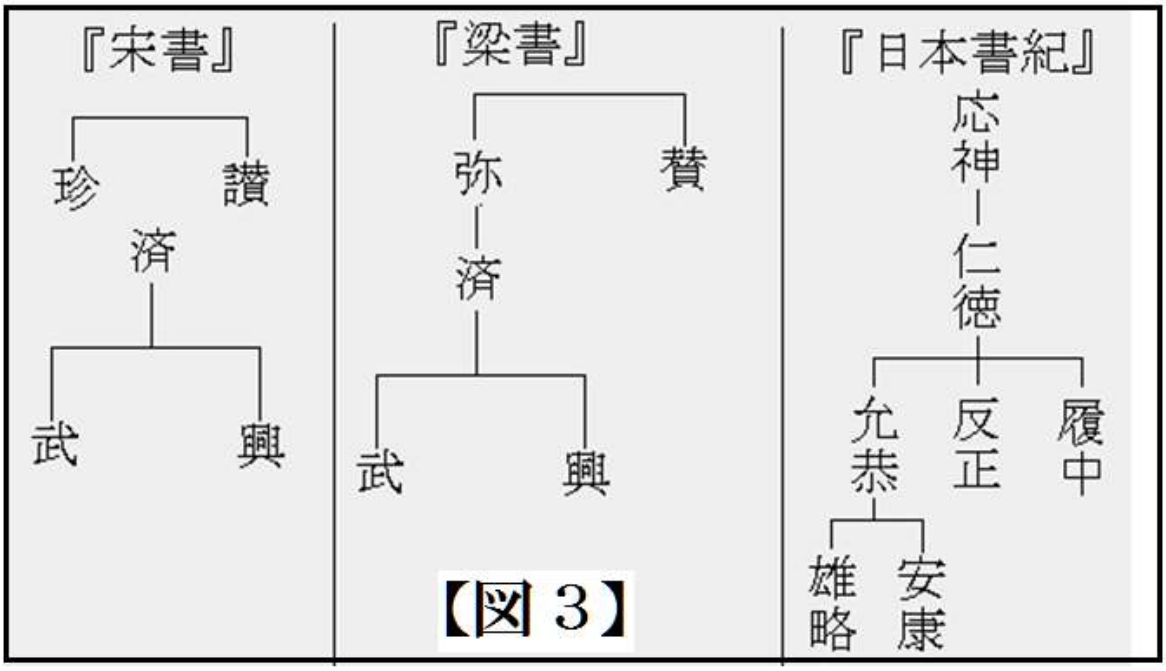
【　？　年】興が死に、弟の武が立ち、使持節、都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍、倭国王を自称した。

【477 年】倭國が遣使を以て方物を貢じた。

【478 年】順帝昇明二年、使を遣し上表して曰く、「封国は残念ながら遠く、藩を外に作り、昔より祖先は自ら甲冑を着け、山川を跋渉し、安らかに暮らす暇なし。東に

毛人を征すること五十五国、西に衆夷を服すること六十六国、（海を）渡り海北を平定すること九十五国。王道は安泰に調和し、国土を拡げ、京畿を遠く離れる。累代に亘って朝廷を尊び、歳を誤らず。臣は下愚といえども、忝くも後裔を先に残し、統べる所を率いて駆け、崇め帰すこと天を極め、道を百済に直行し、船舶を装備する。然るに高句麗は非道にも併呑を欲して謀り、辺境を略奪し隷属させ、（南朝宋の）劉氏を尊重して已まず、（そのために）いつも延滞させられ、（航行の）良風を失する。道を進むといえども、あるいは通じ、あるいは不通。臣の亡き済は、仇敵が天路を塞ぐことを実に憤り、百万の弦を鳴らして訴え、正義の声に感激し、まさに大挙せんと欲するも、突然に父兄が亡くなり、垂成の功をして一簣（モッコ一杯分）も獲れず。諒闇（一年の服喪）に在り、軍装の兵を動かさず、ここに休息するを以て未だ戦勝を得られず。今に至り、甲を練り、兵を治め、父兄の志を述べんと欲し、義士と勇士、文武に功を尽くし、白刃を前に交えるも、また顧みることなし。もし帝徳の覆戴を以てこの強敵を挫き、勝って方難を鎮めるも、前功に替えることなし。密かに開府儀同三司を自ら仮称し、その余も皆、各々に仮授（して頂ければ）、以て忠節を勧める。」詔を以て武を使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭王に叙爵した。

★次に倭の五王の系譜と記紀の応神～仁徳の系譜とを**図３**に示す。

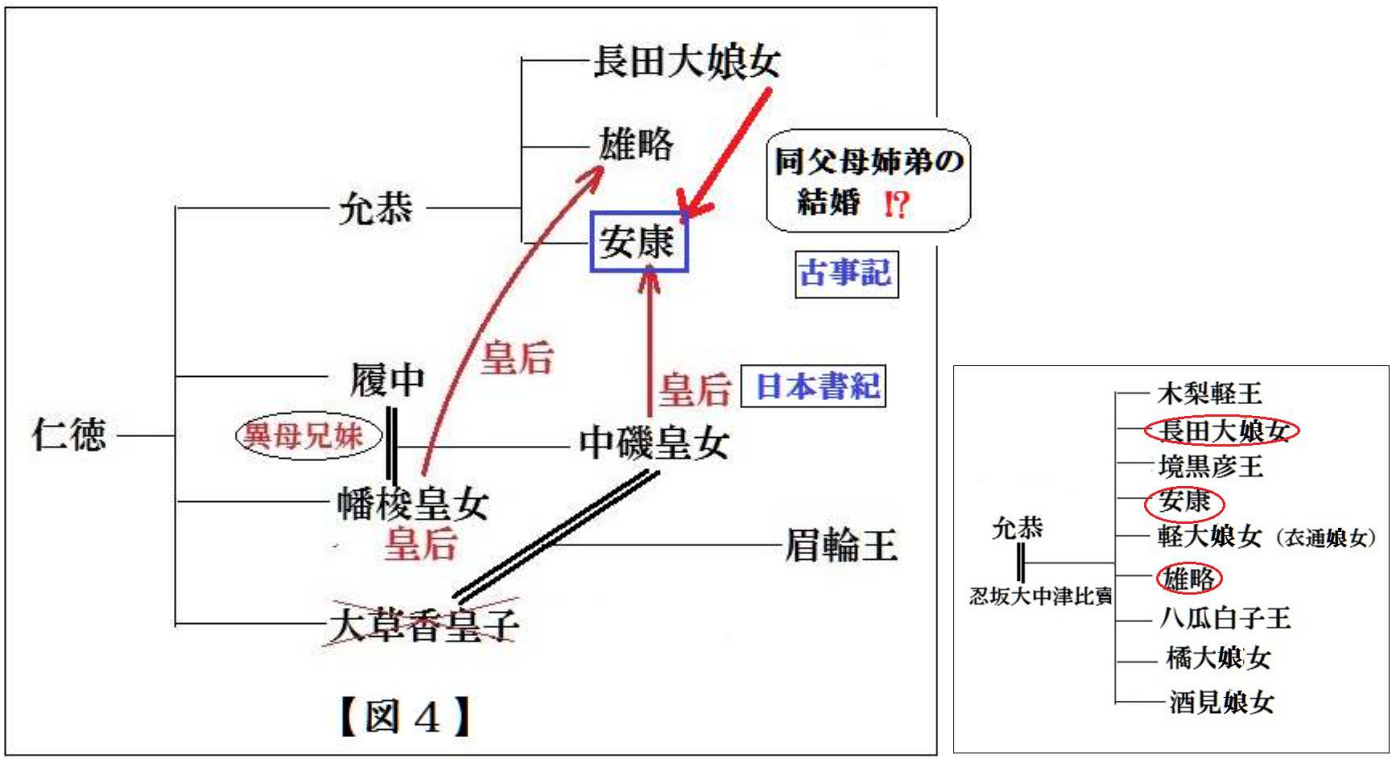


【図３】

★このうち、済＝允恭、興＝安康、武＝雄略とする説は、ほとんどのものが認めるものであり、筆者も間違いないと考える。ところが讃と珍についてはどの大王のことなのか、記紀の系譜と合致しないため様々な説が出されている。そこで、これから筆者の説を解

説していくことにする。結論を先に述べると、讃は仁徳（元イザサワケ・新ホムタワケ）であり、珍は反正（ミズハワケ）と考える。

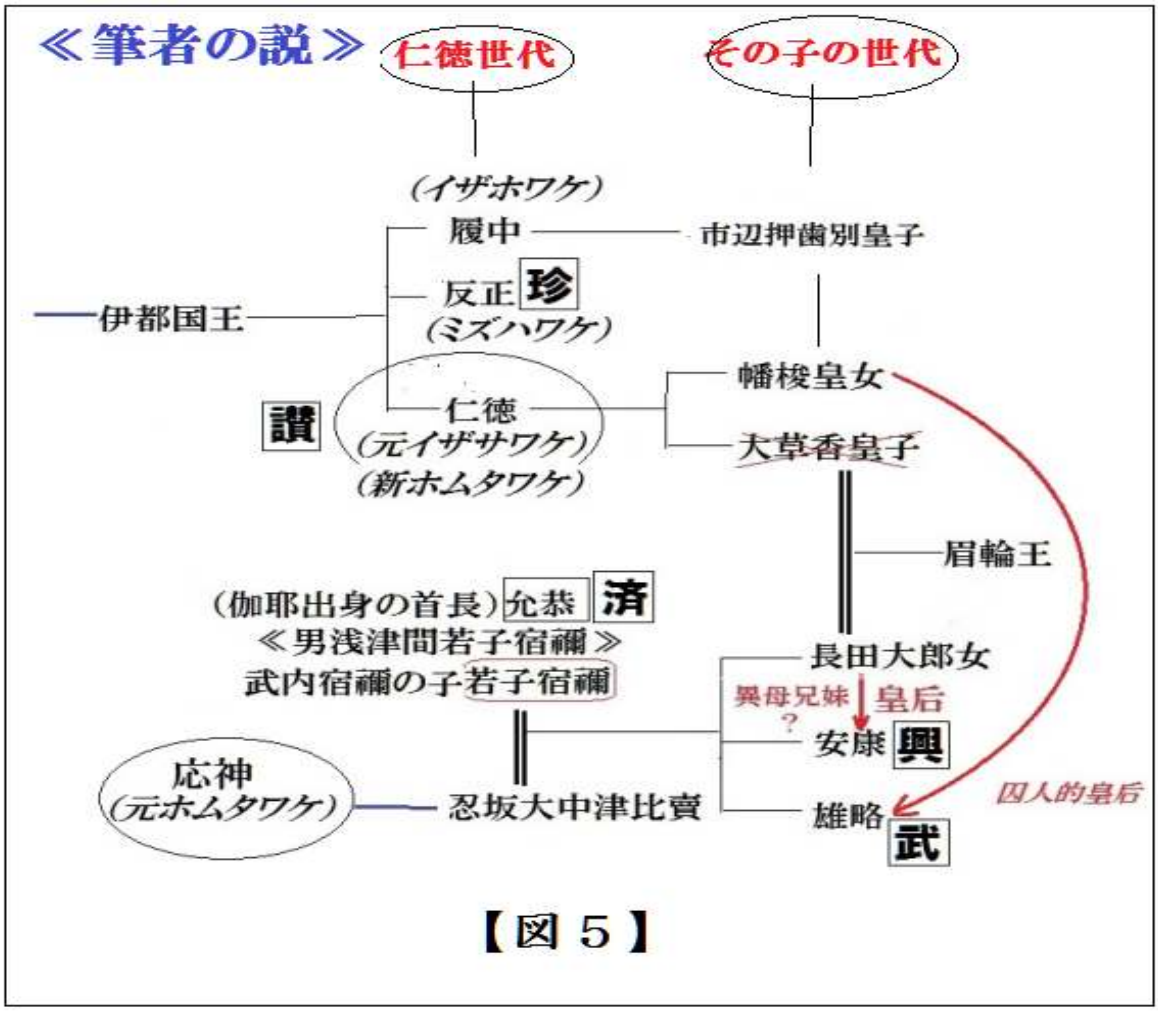
★前回に「応神には元ホムタワケと新ホムタワケの二人の大王が重なっていること」を述べた。また後に解説するが、允恭は応神＝仁徳と血の繋がりがない渡来系の首長である。記紀にはそれ以外にも系譜の改変がなされているため、倭の五王との系譜が異なっているのである。それを詳しく説明していく。記紀の天皇や皇子皇女たちの系譜を**図４**に示す。



【図４】

★允恭の子は９人であるが、この図では雄略、安康、長田太娘女の三人だけ記した。事績では、允恭の後、安康は即位した直後、仁徳の皇子である大草香皇子（母は磐之媛でなく日向の髪長媛）を殺して、その妃であった安康の同父母姉とされる長田太娘女を皇后にする。そして大草香皇子の妹の波多毘若娘女（幡梭皇女）を雄略の妃にする。古事記では、同父母姉を皇后にすることになるので、書紀では長田太娘女の代わりに履中の皇女の中磯媛が大草香皇子の妃になっている。（図参照）重要なことは、大草香皇子兄妹と、允恭の子たちとの世代の違いである。実際には、大草香皇子兄妹と允恭の皇子皇女たちとは同じ世代であったと考えられる。つまり既に述べたように、**仁徳と允恭は父子でなく、ほぼ同じ世代なのである。**

★一方、履中の皇子である市辺押歯別皇子は雄略に謀殺されることから、両者の父の履中と允恭も同世代になる。以上のことと前節で述べたことを合わせて、筆者の説を示したものが**図５**である。この図の要点を解説する。



【図５】

①讃＝新ホムタワケ（応神＝仁徳）珍＝反正（ミズハワケ）

★済＝允恭、興＝安康、武＝雄略であることはまず間違いない。その済、興、武の名は、允恭、安康、雄略の和名の一部を漢字で示したものであることがわかる。済は「允恭＝オアサズマワクゴノスクネ」の「ズマ」を済として、興は「安康＝アナホ」のホを「興」として、武は「雄略＝ワカタケル」のタケルを武として、漢字一字で命名したものである。

これと同様に「讃」も天皇の和名の一部を漢字で表したものと考えられる。讃の字にふさわしい和名の大王はホムタワケ（誉田別）である。「ホム」は“誉める”との意味であることから讃と命名されたと考えられる。そしてそのホムタワケは、中国南朝に朝貢することから垂仁の皇子（元ホムタワケ）ではあり得ず、東遷した新ホムタワケ（元イザサワケ）＝仁徳に違いない。また珍は反正＝ミズハワケ（珍しい歯の王）から珍の字が充てられたと考える。ところが宋書では讃と珍は兄弟になっていて、仁徳の兄弟で大王になった皇子は存在しないので、讃＝仁徳（新ホムタワケ）は成り立たないことになる。

さらに、珍＝反正説は、仁徳の次が履中であることと合致しない。しかし筆者はこの矛盾を記紀の系譜の偽造を明らかにすることより解消することが出来たのである。

②住吉仲皇子の乱と偽造された大王の系譜

★記紀には、仁徳の没後「**住吉仲皇子の乱**」が記されている。乱の原因は波多矢代宿禰の娘・黒姫の奪い合いとされているが、大王位争いであるのは間違いない。（それにしてもこの時期に黒姫が３人も出てきているのは不思議である。）このとき履中（イザホワケ）は物部大前宿禰などの援助によりヤマトの石上に逃げる。住吉仲皇子側には、弟の反正（ミズハワケ）や倭値吾子籠、安曇連浜子、隼人の刺領布などが加わっている。その後、ミズハワケと刺領布が寝返ってイザホワケ側につき、仲皇子を殺して乱が終わったことになっている。この乱に隠された謎を次のように解くことにより真実を探ることが出来る。

≪履中と反正は仁徳の子ではなく弟である。≫

★宋書によれば讃＝仁徳（元イザサワケ）は 413 年以前に即位して 435 年ごろに没していて長期間大王であったことがわかる。一方仁徳は、記では 83 歳没，紀では在位 87 年と記している。この記紀の数字は長寿過ぎるが長期間在位したことは確かなことであろう。

ところが、宋書によると讃の弟の珍は即位から数年後の 442 年ころに没している。日本書紀でも履中天皇の死亡年齢は 70 歳と高齢なのに、在位はわずか６年である。反正の在位も５年である。この仁徳、履中、反正の３人の死因は特に記していないことよりこの時代の一般的な病死と考えられ、死亡の年齢はほぼ同じ程度と推測できる。つまり履中（イザサワケ）と反正（ミズハワケ）は仁徳（元イザサワケ）と生年が近い同じ世代になる。よって仁徳と履中は、親子でなく兄弟であると考えられるのである。イザサワケとイザホワケという類似の名からも、ニギハヤヒとニニギの兄弟やオケとヲケの兄弟と同様、兄弟にふさわしいものである。

★応神－仁徳－履中・反正はほぼ同世代であることの根拠は上記だけではない。物部氏の系譜からも、そのことがわかる。

≪先代旧事本紀・巻第五、天孫本紀より　≪天皇世代と物部氏の世代比較≫

＊10 世孫物部印葉連公、多遅麻大連（9 世）の子である。この連公は、軽嶋豊明宮)で天下を治めた天皇（応神）の御世、授かって大連となり、神宮を祀った。

＊姉に、物部山無媛連公、この連公は、軽嶋豊明宮で天下を治めた天皇（応神）に、立って皇妃となり、太子・菟道稚郎子皇子、矢田皇女、雌鳥皇女(めどりのみこ)を生んだ。

＊弟に、物部大別連公。この連は、難波高津宮で天下を治めた天皇（仁徳）の御世に、詔をうけて侍臣となり、神宮を祀った。

＊同じく 10 世孫・物部伊コ弗連公。五十琴宿禰（9 世孫）の子である。この連公は、稚桜宮の天皇（履中）と柴垣宮の天皇（反正）の御世に大連となって、神宮を祀った。

★物部 10 世孫の兄弟従妹（物部印葉連公とその弟の物部大別連公およびその従妹の物部伊コ弗連公）は、同じ世代なのに、応神からその孫とされる履中・反正までの３世代の天皇の大連などについたことになっている。筆者は、先代旧事本紀のほうが真実と考える。このことからも、**応神－仁徳－履中・反正は、父―子―孫ではないことになり、同世代になる**。つまり履中と反正は仁徳（元イザサワケ）とは親子ではなく兄弟であると考えられるのである。

★住吉仲皇子という名は、同じ磐之媛を母とする同母兄弟（履中の弟）としながら、イザサワケやミズハワケとは全く異なる名前であり、兄弟ではない（または母が異なる）と推測できる。安曇連浜子が最後まで住吉仲皇子側に立っていることから、住吉仲皇子の母親は安曇氏の女の可能性もある。余談になるが、長野県の安曇野に穂高神社がある。敗戦後捕えられた安曇浜子は一族と共に信州へ追放されたのであろう。ただ、安曇氏はその後も倭王権の海神氏族として存続し、磐井の乱や白村江に戦いなどで活躍している。

★履中が太子とされるのに、乱のはじめは住吉仲皇子側のほうが優勢であった。弟のミズハワケも当初は住吉仲皇子側だったことから、むしろ住吉仲皇子のほうが後継者＝太子であり、仁徳（元イザサワケ）の弟である履中（イザサワケ）のほうが皇位を簒奪しようとしたものだろう。ミズハワケの裏切りにより履中が勝利する。ミズハワケはこのような正義に反することをした天皇として、漢風名が反正となったのであろう。

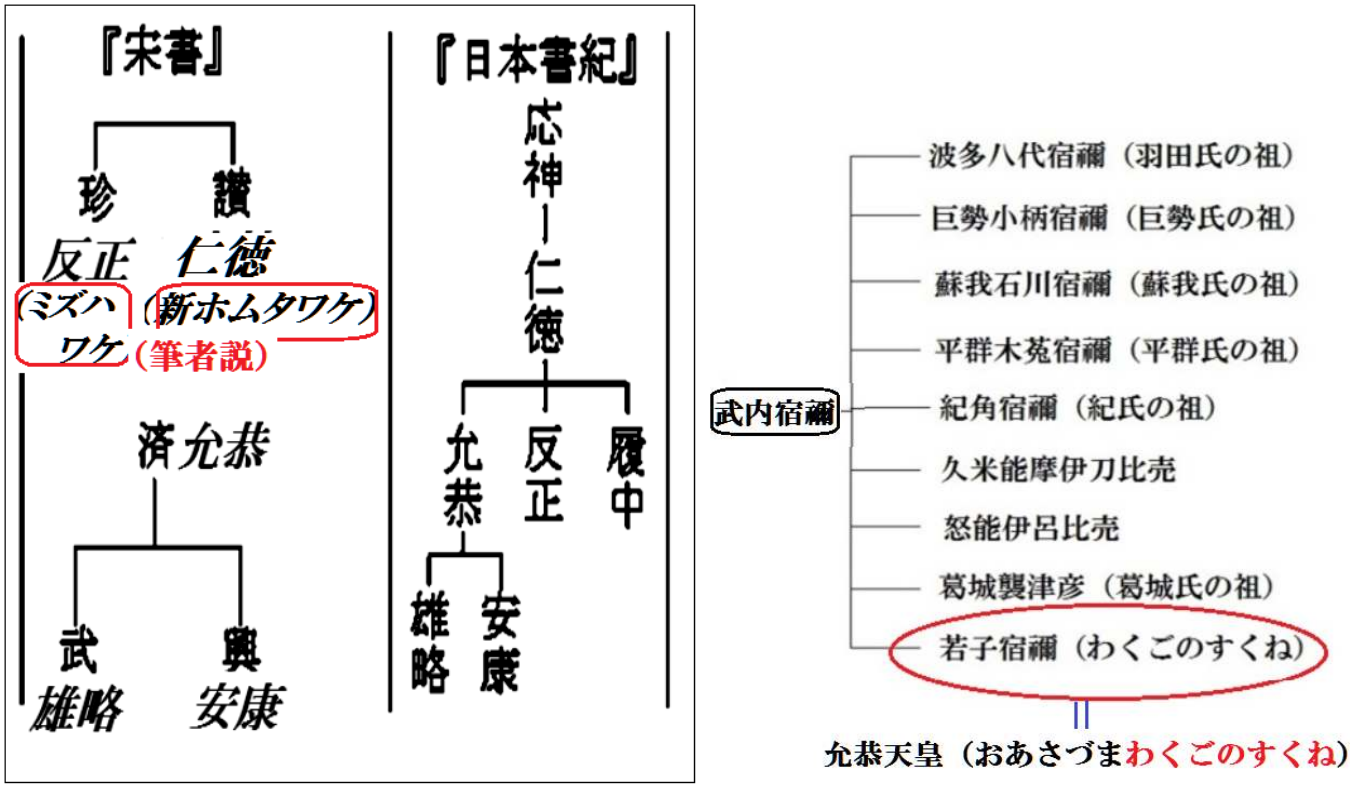
≪珍＝ミズハワケ（反正）が宋に朝貢したのは履中の時代≫

★履中は河内や難波でなく大和の磐余の稚桜宮で即位する。紀では葛城葦田宿禰の娘・黒姫を皇后にして、物部伊莒弗大連、平群木菟宿禰、（葛城）円大臣らに支えられたと記す。王権を勝ち取った地がヤマトであり、また物部氏などの王権を支える主な氏族がヤマトの氏族であったためであろう。また、ミズハワケを厚くもてなして皇太子にしたと記している。当時には皇太子という官名は無かったが、ミズハワケを後継者としたことを示している。そのミズハワケは履中の没後、多比(たじひ)の柴(しば)籠(かき)宮で統治したことになっている。
このことから推測できることは、**イザホワケとミズハワケは大和と河内を分割統治**していたということである。大王位争奪戦の功労者である弟のミズハワケは河内で王（後継者）として政治をとることを容認されていたものと考えられる。そして、この時代の宋（南朝）への朝貢は河内・難波の海人氏族などでもってなされていたことはまず間違いない。履中時代になっても宋へ朝貢は河内・難波から出発したはずである。河内・難波に対する統治力のない履中（イザホワケ）は朝貢の中心にはなれなかったのである。その難波・河内を掌握していたミズハワケこそが、讃＝仁徳亡きあとの朝貢の代表者として（あるいは履中の代理として）倭王を名乗り朝貢したものと考えられる。ミズハワケは「淡路島生まれ」とすることや「安曇氏と親しかった」との記述もこの説を補強する。宋書の「讃が死に弟の珍が立つと遣使を以て貢献した。」との記載を合理的に説明できるのである。

≪済＝允恭は仁徳と血縁関係がない繋ぎの大王≫

★反正天皇（珍）の没後、男浅津間若子宿禰（允恭天皇）は群臣たちの要望を何度も強く辞退したが、妃である忍坂大中姫の強い薦めでようやく即位する。記紀では允恭は仁徳の子で履中や反正と兄弟であるとするが、臣下の意味にあたる「宿禰」という名がついていることから判断できるように、仁徳や履中とは血の繋がりがない人物と考えられる。大王に就くことを強く固辞したことも履中や反正の兄弟でないことの根拠になる。宋書に記す倭王「済」はその先代の「珍」と血の繋がりがないことと合致する。

★古事記には武内宿禰の子の一人に「若子宿禰」が記されている。この「若子宿禰」こそが允恭天皇であると筆者は考えるのである。日本書紀では、武内宿禰の子の「若子宿禰」が消されていることは、逆説的に允恭＝「若子宿禰」であったことを示唆する。つまり、平群木菟「宿禰」、蘇我石川「宿禰」などと同様、韓半島からの渡来系の首長であったのである。葛城の朝妻（現御所市）に本拠を構えていたのであろう。元イザサワケ（仁徳）と関係が強い伽耶のクニの貴種であったとも考えられる。応神（元ホムタワケ）の皇女（あるいは孫）である忍坂大中姫を妃としていたことが重要な点である。反正の死後、履中の皇子（市辺押歯別）までの繋ぎの大王として就いたと推察できる。



★以上のように、これまで詳しく述べてきた倭の五王についての筆者の説は、決して創作ではなく、多くの根拠でもって、記紀の矛盾（偽り）を最も合理的に説明出来るものなのである。

3　天照系による復讐＝渡来系の殲滅

≪反正没後から継体擁立までの諸事件≫

＊允恭の即位と玉田宿禰の誅殺

＊軽太子の謀殺と安康即位

＊大草香皇子の抹殺と眉輪王による安康の刺殺

＊大泊瀬皇子（雄略）による、八瓜白彦皇子・坂合黒彦皇子・円大臣の誅殺

＊市辺押歯別王の謀殺

≪雄略没後≫

＊飯豊皇女による朝政とオケ・ヲケの発見（顕宗天皇と仁賢天皇）

＊顕宗による雄略陵の破壊

＊武烈没後の平群真鳥の誅殺と継体擁立

★それではこれからいよいよ筆者が「最も壮絶な王位争奪戦」と感じている二王統の争いについて解説していく。**天照系**とは神武＝崇神の血を引く忍坂大中姫と安康・雄略のことで、**渡来系**とは、仁徳、大草香皇子、履中、市辺押歯別皇子のことである。前回に述べたが、渡来系の仁徳が葛城氏など渡来系氏族に支えられて、天照系（元ホムタワケ系）を屈服させて河内に強固な王権を成立させた。しかし、仁徳の死後の住吉仲皇子の乱は渡来系王権を弱体化させることとなったのである。この乱がなければ渡来系の河内王権は安定して続いていただろう。天照系の復活の第一歩は、履中が天照系の氏族である物部氏を頼りかつヤマト（磐余の稚桜宮）を本拠としたことである。さらに允恭の即位が天照系の力を決定的に強めることになった。

★記紀には、この允恭時代から欽明天皇に至るまで何代にもわたり、葛城氏や物部氏をからめて凄まじい大王位争奪の争いをしていくことが記されている。允恭の皇后となった忍坂大中姫（安康・雄略の母）は、父（または祖父）の応神（元ホムタワケ）を屈服させ異母兄の菟道稚郎子皇子を殺して大王位を簒奪した渡来系の王たちと葛城氏に対する**復習**を始めることになったのである。単なる兄弟間の大王位争いなら、これほどまで何代にもわたる争いにはならないはずである。允恭は群臣たちによって擁立された大王であることから、允恭自身は強権専制的な大王ではなかったのである。大王位争奪戦を主導したのは、既に述べたように皇后となった忍坂大中姫であると推測できる。その皇后という地位を利用して、仁徳系（渡来系）の皇子たちや葛城氏を復讐的にことごとく誅殺していったのである。記紀の記述から彼女は強い女性であったことや、安康紀や雄略紀にも皇太后としての事績が詳しく記載されている。このような皇太后は古代では彼女だけで、彼女が強い権力を持っていたことがわかる。雄略時代に葛城氏（円大臣）は滅び、渡来系王族（市辺押歯別皇子）もほぼ滅んでしまう。権力をつかんだ天照系を支えてその手足として働いたのが物部氏なのである。記紀において、物部氏は垂仁紀の**物部十市根**から全く記されていな

かった。つまりそれまでは王権の中枢からは外れていたのである。ところが履中紀に**物部大前宿禰大連**が記され始め、それ以降雄略紀までに、**物部伊莒弗大連**、**物部長真胆連**、**物部目大連**、**物部兎代宿禰**、**物部大斧手**など多くの物部氏の人物が登場する。履中時代から王権を支える最大氏族となったことを示している。また、物部氏と同じ天照系の氏族である大伴氏も雄略紀で復活している。

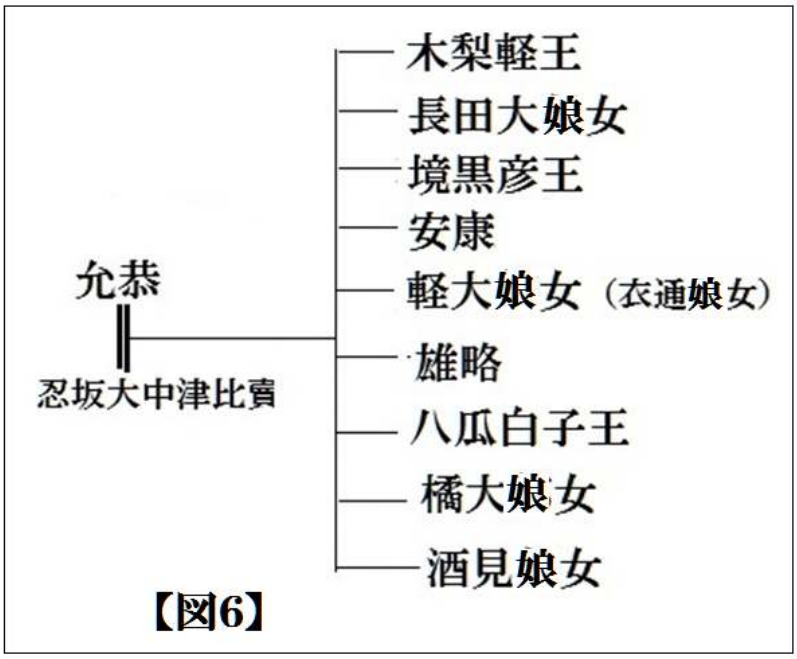
★垂仁以来途絶えていた伊勢神宮への斎宮（雄略の女・稚足姫皇女）の派遣も雄略時代に復活する。以上のことからも、雄略天皇は天照・崇神系の大王であったことがわかる。ただ、渡来系氏族でも平群氏や紀氏は滅ぼされず存続している。仁徳系王族と葛城氏のみを仇としていたものか、あるいは平群氏や紀氏は忍坂大中姫と雄略に恭順したのであろう。

(1) 玉田宿禰の誅殺

★日本書紀允恭５年に、玉田宿禰（葛城襲津彦の孫）が反正天皇の殯に参加しなかったとして、允恭は尾張吾襲という人物を玉田宿禰に派遣する。そこで玉田宿禰が吾襲を殺したことから、天皇は玉田宿禰の家を囲んで殺す。天皇側の尾張吾襲は尾張氏の人物で物部氏と同祖であり崇神系の人物である。（ただこの記事は古事記には記されていない。）またこの玉田宿禰の子とされる円大臣が履中紀に「円大使主（おみ）」として記されている。子供のほうが先に大臣として記されているのも不可解であり、記紀の編集のときには滅ぼされた葛城氏の系譜がはっきりわからなかったものと考えられる。なお円大臣は雄略時代に殺される人物でその娘の韓媛が雄略の妃になっている。

(2) 允恭の九人の皇子皇女は同母兄弟ではない

★下の**図６**に示すように記紀では允恭と忍坂大中姫の間には９人の皇子皇女が生まれたことになっている。



【図6】

皇位に就いたのはアナホ（安康）とオオハツセ王（雄略）である。他の木梨軽皇子、境黒彦王、八瓜白子王の３人は　追放されたり殺されたりしている。彼らがアナホ（安康）とオオハツセ王（雄略）と同父母兄弟とは考えられない。他に妃を娶らずに皇后だけが９人も生んだことも疑わしい。これだけでは同母兄弟ではないことの根拠として薄いが、允恭紀～雄略紀の記述から同母兄弟ではないことがわかる。このことを含めて皇位争奪戦を説明していくことにする。

①軽太子の謀殺

★日本書紀では、允恭 23 年に年長の皇子である木梨軽皇子を太子にしたと記されている。その翌年に「**軽太子と同母妹の軽大娘皇女が通じているという噂**」があり調べたところ事実であったので軽大娘皇女を伊予に追放したことになっている。

（古事記では允恭の死後に、軽太子と軽大娘皇女が通じていたと記している。）

允恭 42 年に允恭が没してから、軽太子は淫乱で婦女を暴行したので人心は軽太子から離れアナホ（安康）についた。そこで軽太子はアナホを殺そうとしたが失敗して物部大前宿禰の家に逃げ込む。アナホのほうも兵を挙げて大前宿禰の家を取り囲んだので、太子は自殺したと記している。

（古事記では大前宿禰が軽太子を捕えて伊予に流すことになったが、
軽太娘皇女と共に死んだことになっている。）

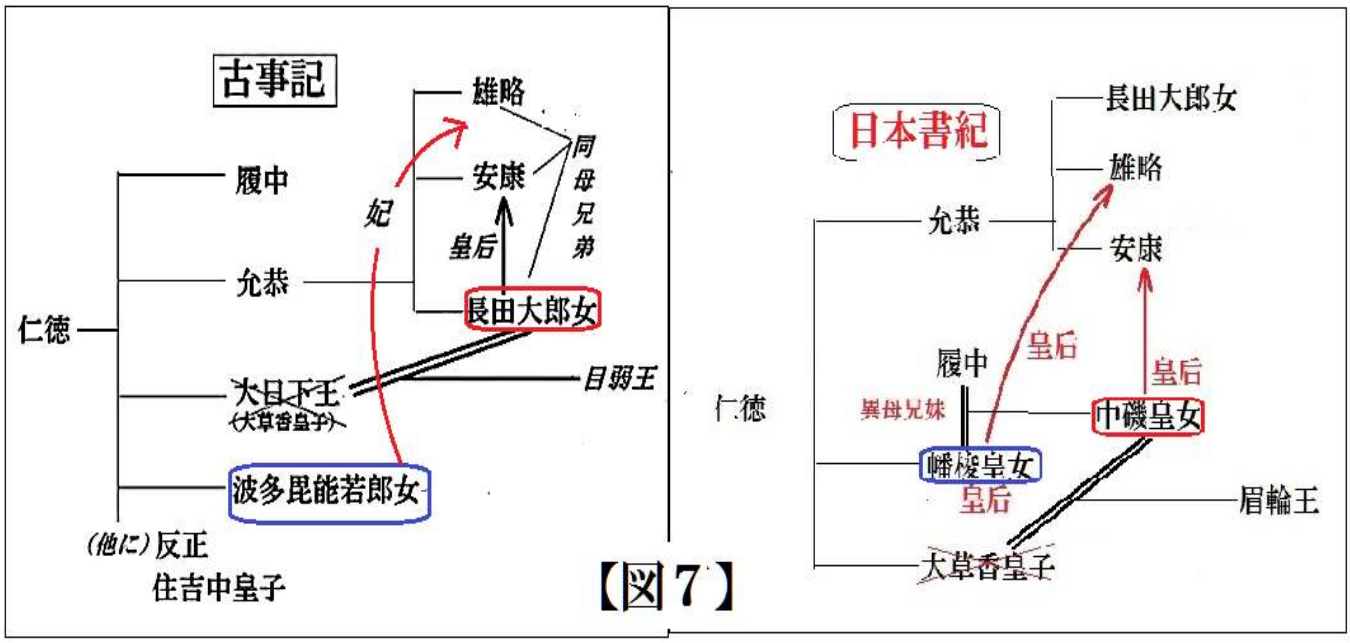
★この事件は、允恭の皇后（忍坂大中姫）が我が子のアナホを天皇にするために仕組んだ謀略と推察できる。軽太子が忍坂大中姫の実子ではなかったからであろう。兄弟通じたとのウソの噂を流して軽太子に罪を着せたことは創作の可能性がある。いずれにしても、軽太子兄妹は殺されたか、または追放されたことは間違いない。以後に起きた事件を含めて判断すると、軽太子謀殺が正しいことがわかる。

②大草香皇子の抹殺および長田太郎皇女と幡梭皇女の強奪

★この事件では、記と紀では人物が少し違うので古事記の記述から説明する。

安康天皇が石上の穴穂の宮で即位した直後、安康は根臣を大日下王（大草香皇子）に遣わして、大日下王の妹の若日下王（波多毘能若娘女）を大長谷王（後の雄略）の妃として迎えたいと要求する。大日下王と若日下王の兄妹は仁徳と日向の髪長姫の間に生まれた皇子皇女である。大日下王はこの安康の要求を受諾して、その証として「**押木の玉縵**」を差し出す。

ところが、遣使の根臣は安康には「大日下王（大草香王子）は要求を断りました。」とウソの報告をして、玉縵を横取りしてしまう。そこで怒った安康は兵を差し向けて大日下王を殺して、妃であった長田大娘女を自分の皇后にする。また若日下王（幡梭皇女）は後に雄略天皇の妃（紀では皇后）になる。以上のことを系譜で図に示すと**図７の左**のようになり、系譜が偽られていることは明らかである。



【図７】

（ア）大日下王（大草香王皇子）兄妹と安康・雄略などの世代が違っている。

（イ）**古事記では**大日下王の妃であった長田大娘女は安康天皇と同父母姉弟の関係である。
同父母の姉を大日下王から奪って皇后にしたことになり、あり得ないことである。

★そこで**日本書紀**ではこの矛盾を解消するために、大草香皇子（大日下王）の妃は履中と若日下王（幡梭皇女）の間に生まれた中磯皇女としている。（**図６の右**）

実父母姉を皇后としたことは解消されている。しかし、履中が異母妹の若日下王（波多毘能若郎女）を妃としたことはあり得ないことではないが、古事記には記されていないことからその可能性は低い。履中の妃は葦田宿禰の娘の黒姫（市辺押歯別王の母）だけである。さらに履中が亡くなってから 40 年以上が経っている。そのようなときに履中の妃であった女性が後に雄略の皇后になることは到底考えられない。また、大草香皇子と中磯皇女などの世代の矛盾は解消されていない。おそらく日本書紀は「**安康天皇が同父母姉を皇后としたこと**」を解消するために中磯皇女という存在しなかった皇女を創作したのであろう。

★つまり日本書紀より古事記の「**安康天皇は長田大娘女を皇后としたこと**」のほうがむしろ真実であると考えられるのである。ただし、安康天皇と長田大娘女は同父母姉弟ではなく、異母姉弟であると推測できる。それは姉弟が育った地域が違うこともこの説を補強する。

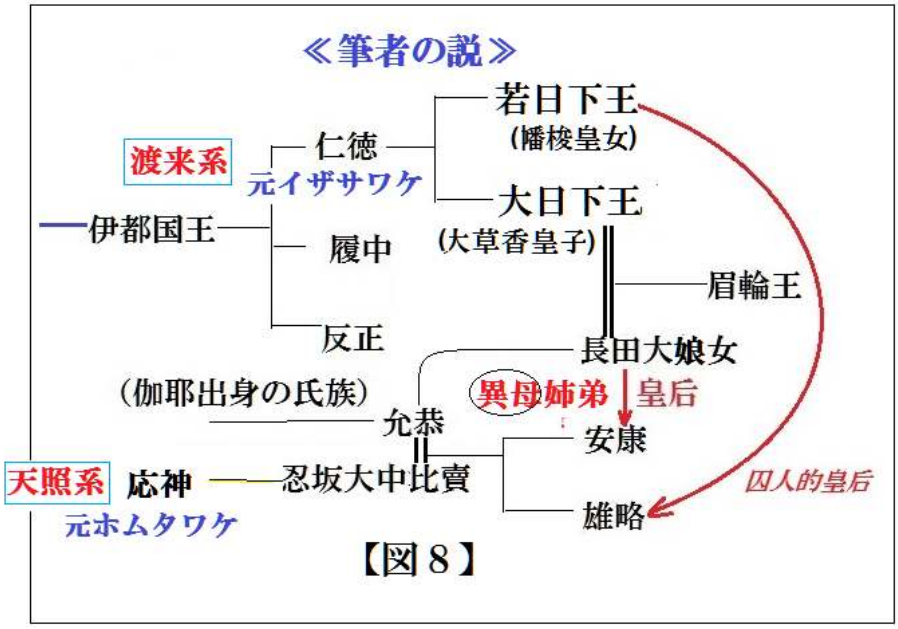
安康・雄略はヤマト（天理や桜井市）で育っている。皇后の地盤である忍坂（桜井市）の傍であり、物部氏の地盤とも重なっている。それに対して、長田大娘女の長田は現東大阪市の長田の地のことで、彼女はこの地で育ったことがわかる。長田大娘女の母は忍坂大中姫ではなく、渡来系氏族の女であったのである。安康が大日下王を殺した後で、子供の目弱王ともども妃であった長田大郎女を引き取り皇后としたのは、長田大娘女が安康の異母姉であったからと考えられる。そうすると、安康・雄略以外の兄弟も忍坂大中姫の実子でないことになる。兄妹が通じたとして殺された軽太子と軽大娘皇女は忍坂大中姫の実子でないことを既に述べた。「軽」ということから現橿原市の大軽町で育った兄妹と考えられる。この地は広い意味での飛鳥であり渡来系が住む地域で葛城氏の本拠の傍である。

さらに、残る二人の皇子である境黒日子王と八瓜白日子も忍坂大中姫の実子ではないのである。その根拠は、安康が目弱王に殺されたときに、大泊瀬皇子（雄略）が、いとも簡単にこの二人の皇子を殺してしまっていることである。同母の兄弟ならあり得ない。皇太后の忍坂大中姫と大泊瀬皇子が、有力な皇位継承者であった異母兄弟を殺したとするほうが説明がつく。つまり允恭の５人の皇子のうち忍坂大中姫の子は安康と雄略だけと考えられる。皇后忍坂大中姫は、わが子を大王位につけるために物部氏の武力を借りて、異母兄弟の軽太子、境黒日子王、八瓜白日子を次々と抹殺したのである。

殺された３人の母は渡来系氏族の娘であったのであろう。そのうち、軽太子と軽大娘皇女の兄妹の母は葛城氏の娘であった可能性が高いと考えられる。

★この天照系による渡来系皇子の殲滅戦を隠すため、記紀では允恭の９人の皇子皇女はすべて忍坂大中姫の子として、単なる兄弟間の皇位争いとしたのである。その結果、安康が同父母姉の長田大娘女を皇后としたことになってしまったということである。

★この異母姉弟説と以前の示した「仁徳・履中兄弟、允恭非兄弟説」をもとにして筆者の説を示すと**図８**のようになり、系譜がすべて合理的なものになる。記紀での世代の違いや親子兄弟関係もすべて矛盾が解消されている。



【図８】

≪世代が合致する筆者の説≫

＊**応神**（元ホムタワケ）は仁徳・履中兄弟より半世代ほど上である。

＊**允恭**は仁徳・履中より少し世代が少し下で、応神の娘（または孫）である忍坂大中姫とはほぼ同じ世代である。

＊仁徳の子である大日下王（大草香皇子）と若日下王（幡梭皇女）は、允恭の子の長田大娘女と安康より少し年長で、雄略はかなり年少と考えられるが、婚姻関係が成立しないほどは離れていないことになる。

③安康の死と眉輪王（目弱王）・円大臣の誅殺

★日本書紀によれば、安康３年、父の大草加皇子が安康によって殺されたことを知った幼い眉輪王（古事記では７歳）は、安康が熟睡しているところを父の仇として刺し殺す。このとき少年だった大泊瀬皇子は、この事件を知って怒り狂い、自ら甲冑をつけて兵を率いてまず兄の八瓜白彦皇子を殺す。そして兄の坂合黒彦皇子と眉輪王を問い詰めるが、坂合黒彦皇子と眉輪王は隙を見て円大臣の家に逃げ込む。（古事記では、先に黒彦皇子を次に八瓜白彦皇子を殺し、眉輪王だけが円大臣の家に逃げたことになっている。）円大臣の家を兵で取り囲んだ大泊瀬皇子に対して、円大臣は二人の引き渡しを拒否して、領地と娘の韓媛を差し出す。それでも大泊瀬皇子は、許さず家に火をつけて、円大臣と坂合黒彦皇子、眉輪王焼き殺してしまう。（古事記では円大臣は兵を取って戦ったが敗れて死んだことになっていて、おそらくこちらのほうが真実であろう。）このように兵を率いて大臣の家に攻め込むことは、少年の大泊瀬皇子ではできないことである。皇太后の忍坂大中姫の命があったと推察する。また、黒彦皇子と白彦皇子が安康・雄略と同母兄弟でなかったことは明らかである。もし黒彦皇子と白彦皇子が大泊瀬皇子の同母兄なら、兄を殺した眉輪王をかばうことや円大臣の家に逃げ込むことなどはありえない。大泊瀬皇子と共に眉輪王を攻めたではずである。眉輪王は血筋的に葛城氏とは直接の関係がない。むしろ黒彦皇子と白彦皇子が円大臣と関係がある葛城氏系の皇子だった可能性が強い。安康の殺害は眉輪王の単独とは考え難く、眉輪王の母である長田大娘女がそそのかした可能性がある。いずれにしても、この事件で葛城氏は完全に滅んでしまう。

（３）市辺押歯別王の謀殺

★安康の死を利用して政敵をことごとく抹殺することに成功した忍坂大中姫と雄略が次に抹殺の標的としたのは履中の子・市辺押歯皇子である。日本書紀には、安康が生前に「**市辺押歯皇子に皇位を伝えて後事をゆだねようとしていた。**」と記している。雄略は大王にはなったものの、血筋的には雄略より市辺押歯皇子のほうがふさわしかったのである。市辺は現滋賀県の日野町と考えられる。押歯皇子は有力な皇位継承者としてヤマトや河内から離れた安全なその地で暮らしながら大王となる時期を待っていたのであろう。

そのような中で、雄略は「近江の来田綿の蚊屋野」で狩りをしようと持ちかけて、押歯皇子を誘い出す。そして雄略は鹿を射るふりをして馬上から押歯皇子を射落とし切り殺す。そしてヤマトでは押歯皇子の弟の美馬皇子も襲われて殺される。なお、後の雄略没後、押歯皇子の子のヲケとオケは播磨に逃れ、雄略の没後、顕宗天皇と仁賢天皇として即位する。

★さてこの押歯皇子謀殺事件は眉輪王事件と同じ年に起きたように記しているが、即位もしていないまだ少年の大泊瀬皇子が狩りを誘うということは考え難い。また、押歯皇子には、ヤマトでの壮絶な殺戮の皇位争いも伝わっていたはずである。押歯皇子は、謀略を繰り返した忍坂大中姫と雄略を警戒していて、眉輪王の事件の直後に誘いにのることは考えられない。おそらく何年か経て雄略王権が安定してきたときに、起きた事件であると推察できる。さらに筆者の大胆な仮説では雄略はヤマトでは大王の位についたけれど、倭国の大王としては雄略を認めない勢力が存在したと考えられる。安康の後は市辺押歯皇子で決まっていたのではないかということである。既に述べたように、允恭は繋ぎの大王であったというのが筆者の説である。元イザサワケ（仁徳）やイザホワケ（履中）の血統を有するもの＝市辺押歯皇子が倭王（大王）にふさわしく、それを望んでいた氏族が多かったのであろう。

筆者がこの説を考えるようになった根拠は、倭王武（雄略）の南朝宋へ朝貢したときの上表文からでる。

（4）倭王武の上表文からわかる雄略即位の遅れ

★倭王武の上表文（和訳）は次のようなものである。

「皇帝の冊封をうけたわが国は、中国からは遠く偏って、外臣としてその藩屏となっている国であります。

昔からわが祖先は、みずから甲冑をつらぬき、山川を跋渉し、安んじる日もなく、東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、北のかた海を渡って、平らげること九十五国に及び、強大な一国家を作りあげました。

王道はのびのびとゆきわたり、領土は広くひろがり、中国の威ははるか遠くにも及ぶようになりました。わが国は代々中国に使えて、朝貢の歳をあやまることがなかったのであります。

自分は愚かな者でありますが、かたじけなくも先代の志をつぎ、統率する国民を駈りひきい、天下の中心である中国に帰一し、道を百済にとって朝貢すべく船をととのえました。

　ところが、高句麗は無道にも百済の征服をはかり、辺境をかすめおかし、殺戮をやめません。そのために朝貢はとどこおって良風に船を進めることができず、使者は道を進めても、かならずしも目的を達しないのであります。

わが亡父の済王は、かたきの高句麗が倭の中国に通じる道を閉じふさぐのを憤り、百万の兵士はこの正義に感激して、まさに大挙して海を渡ろうとしたのであります。しかるにちょうどその時、にわかに父兄を失い、せっかくの好機をむだにしてしまいました。そして喪のために軍を動かすことができず、けっきょく、しばらくのあいだ休息して、高句麗の勢いをくじかないままであります。いまとなっては、武備をととのえ父兄の遺志を果たそうと思います。正義の勇士としていさをたてるべく、眼前に白刃をうけるとも、ひるむところではありません。もし皇帝のめぐみをもって、この強敵高句麗の勢いをくじき、よく困難をのりきることができましたならば、父祖の功労への報いをお替えになることはないでしょう。みずから開府儀同三司の官をなのり、わが諸将にもそれぞれ称号をたまわって、忠誠をはげみたいと思います」（中央公論社『日本の歴史１』　神話から歴史へ　井上光貞著　より）

★この文はしっかりした優れた漢文で書かれている。雄略時代には百済の昆支王が人質として滞在しており百済とは交流があった。高句麗をきわめて敵視した書き方からも、おそらく漢文に詳しい渡来系の文官（史部の**身狭村主青**と**檜前民使博徳**）が雄略の側近として書いたものであろう。なお、**身狭村主青**と**檜前民使博徳**は、雄略紀に呉（南朝の宋）に行ったと記されている。

さてこの上表文について本論に関係あるところのみを検討する。それは「**朝貢が遅れた**」理由として２点述べていることである。

（ア）「高句麗が道をふさいだこと」と
（イ）「にわかに父兄が亡くなった」ことである。

しかし（ア）は遅れた理由ではないはずである。というのは、百済本紀などによれば百済の蓋鹵王は 471 年に宋に、472 年には高句麗に近い北魏にも朝貢している。当時高句麗と戦争状態であった百済でさえ朝貢しているのである。倭国が宋へ朝貢することは百済の協力で出来たはずで、高句麗が道をふさいだというのは偽りで、高句麗の悪業を述べたい百済人の意図があったからであると考えられる。

★よって、武（雄略）の朝貢が遅れた理由は（イ）の「にわかに父兄が亡くなった」ことなのである。興（安康）は父（済＝允恭）が亡くなった 462 年の直後に朝貢している。よって、雄略の朝貢が遅れた理由は父の死ではなく、さらに「兄がにわかに亡くなった」ことに絞られる。日本書紀では安康（興）は在位３年で亡くなり、雄略（**大泊瀬皇子**）はその年に大王位についたことになっていて、465 年頃には雄略（**大泊瀬皇子**）は倭王であったことになる。ところが武（雄略）の朝貢は 477 年の十数年後になっている。

珍（反正）は 438 年、済（允恭）は 443 年、462 年、全て大王位についた直後に朝貢していて、雄略の朝貢だけが遅れてしまっている。よって上表文では武（雄略）が遅れた

ことを謝っている記述になっている。高句麗の大軍によって百済が一旦滅ぶ 475 年ころまでは、倭国の宋への朝貢は可能であった。しかし朝貢が出来なかった。その理由は何か、それは、朝貢に関係する海人族や北部九州の氏族などを武（雄略）が完全に倭国を掌握していなかったからだと考えられる。

（5）雄略と市辺押磐王の二王併立の可能性

★まだ少年だった大泊瀬皇子（雄略）を大王として認めない勢力が少なからず存在したのである。履中の嫡子である市辺押磐皇子の存在が大きかったのであろう。その勢力にとっては、大泊瀬皇子よりも押磐皇子のほうが大王にふさわしかったのである。つまりヤマトでは雄略の王権が成立していたが、一方では押歯皇子を倭王とする勢力があり、二王併立の時期だったと考えられる。既に述べた「**安康天皇は市辺押歯皇子に皇位をゆだねようとしていた。**」との日本書紀の記述もこの説を補強する。播磨風土記では市辺押磐皇子を「**市辺之天皇**」と記している。さら日本書紀にも押歯皇子が大王であったとすることを記している記述がある。後の雄略の死後、播磨で押歯皇子の子であるヲケとオケの二皇子が見つかったとき、ヲケは次のように歌ったと記している。「**石上布留の神杉を伐りまた末を押し払うように、四周をなびかせて市辺宮で天下をお治めになった押磐尊の御子であるぞ、我は。**」

★このような二大王併立の時期であったからこそ雄略の宋への朝貢はできなかったのである。そしてこのような準安定な時期が続いた約十年後に、雄略は巧みに押磐皇子を誘い出して謀殺したのである。このときの雄略は弓で押磐皇子を射落とす力があったことから少年ではなく壮年になっていたと考えられる。また市辺押歯皇子のヲケとオケの二人の子供も既に少年として成長していたことからも、押歯皇子の謀殺の時期は安康の死の年（465 年前後）ではなくある程度の年月が経ったときと考えられる。それはおそらく 475 年前後である。そして押歯皇子の死により雄略はようやく倭国全体の大王になることができたのである。そして、宋への朝貢が出来るようになり、478 年の上表文での朝貢となったと考えられる。

このようにして、忍坂大中姫と雄略天皇は渡来系の皇子たちと葛城氏を、ほぼすべて抹殺し天照系の王権を成立させた。しかし雄略の死後には渡来系が復活する。

それは、播磨に逃れていたヲケとオケである。次の章では渡来系の大王の復活から欽明による二王統の統合までを解説していく。

4　二王統の融合と欽明天皇

★これまで述べてきた二王朝の争いは、筆者の空想であり到底賛同出来ないと考える読者ものも多いだろう。しかし日本書紀には、二王統の争いであることをはっきりと記している

記述がある。本章ではまずこれについて述べる。**欽明紀の始めに次のようなことが記されている。**

「天国排開広庭（後の欽明）が幼少のとき、父の継体天皇の夢に人が現れて『天皇が秦大津父という人を寵愛されれば、天国排開広庭が壮年になって必ず天下を治められるでしょう。』といった。夢がさめてから人を遣わして広く探されたら、山城国紀郡　の深草の里に、その人を見つけた。名前は夢の通りであった。珍しい夢であるとたいへん喜ばれ、秦大津父に『なにか思い当たることはなかったか』と問われると、『特に変わったこともございません。ただ、私が伊勢に商いに行き、帰るとき、山の中で二匹の狼が咬み合って、血まみれになったのに出会いました。そこで馬からおりて、手を洗い口をすすいで、あなた方は恐れ多い神であるのに、荒々しい行いを好まれます。もし猟師に出会えば、たちまち捕えられてしまうでしょう』といいました。咬み合うのをおしとどめた、血にぬれた毛を拭き、洗って逃がし、命を助けてやりました。」とお答えした。天皇は「きっとこの報いだろう」といわれ、大津父を召され、近くにはべらせて手厚く遇された。」

★秦大津父は応神天皇のときに渡来した弓月の君の子孫で秦氏の先祖の人だが、それよりも重要なことは「**二匹の狼が咬み合っていること**」を「**恐れ多い神の争い**」としていることである。いつまでも争っていたら猟師＝新羅に敗北しますよ、という意味に解釈できる。つまり**「狼＝大神の争い」は明らかに二王統の争いのこと**で、欽明こそがその二王統の争いを止揚できる大王なのである。欽明の父である**継体**は応神（元ホムタワケ）の五世の孫で天照系であり、母の**手白香皇女**は履中（イザホワケ）の孫で渡来系である。欽明は二王統の両方の血を受け継いでいる。継体が「きっとこの報いだろう」と語ったことは、継体自身は天照系だが、子の欽明が二王統を統合するために渡来系氏族の秦大津父を優遇したと考えられる。

(1) 渡来系大王の復活

①雄略後の謎

★日本書紀によれば雄略天皇は在位 23 年で百済の東城王が即位したと同年の 479 年（古事記では干支が己巳の 489 年）に没したと記す。その後、白髪武広押国稚日本根子（清寧天皇）が即位したことになっている。清寧の謎の一つは、皇后もなく子もなく白髪部を設置した事績だけが記されていることである。欠史八代と類似の「広押国稚日本根子」という名であることからこの天皇は存在しなかった可能性があるが、筆者はこの天皇は実在していたとして論をすすめる。生まれながら白髪であったとすることから、何らかの障害をもった皇子だったのであろう。謎の二つめは、雄略と吉備の稚媛の子である星川皇子の乱が起こるが鎮圧されたことである。星川皇子は母の稚媛の誘いに従って大蔵の役所を手中に収めるが、大伴室屋大連らによって焼き殺される。吉備上道臣は星川皇子を救おうと舟四十艘でやってくるが、皇子が殺されたということを知り吉備に

帰ってしまう。日本書紀にはこの事件について、詳細に書かれているが、古事記にはこの乱どころか星川皇子の存在すら記していない。古事記にはなく日本書紀に記されている事項は通常は創作されたことが多いが、この乱に関してはわざわざ創作する理由もないことから実際にあったことと考えられる。当時ヤマト王権の支えていた大伴室屋や平群真鳥らにとっては、吉備系の皇子が大王になることを認めることは出来なかったのであろう。

②オケ･ヲケの二皇子発見と飯豊皇女

★古事記には、清寧が崩じた後、日継ぎの御子を探し求めたところ、市辺押歯皇子の妹の忍海郎女（飯豊皇女）が葛城忍海の高木の角刺宮に居たと記す。さらに、山辺連の小楯が播磨の国の志自牟の家でオケ・ヲケの兄弟を見つける。このことを知った二皇子の叔母飯豊皇女はたいそう歓んで二皇子を宮（角刺宮）に迎え入れる。

日本書紀では少し異なっていて、二皇子の発見は清寧の生存中で、清寧が嘆息して「めでたくたいへん悦ばしいこと」と語り、清寧３年に宮中に二皇子を迎え入れて、兄のオケ（後の　仁賢天皇）を皇太子とする。飯豊皇女についてはその後に記されている。まず飯豊皇女が角刺宮で男と交合をして「人並みに女の道を知ったが、別に変わったこともない。以後男と交わりたくない」と言ったと記している。また、飯豊皇女は二皇子の叔母ではなく姉としている。そして清寧が崩じてから、二皇子が大王位を譲り合い長らく位につかなかったので、飯豊皇女が忍海の角刺宮で「仮に朝政をご覧になった。」と記す。

（筆者は古事記のほうが真実に近いと考える。）

角刺宮跡とされている角刺神社
（奈良県葛城市）

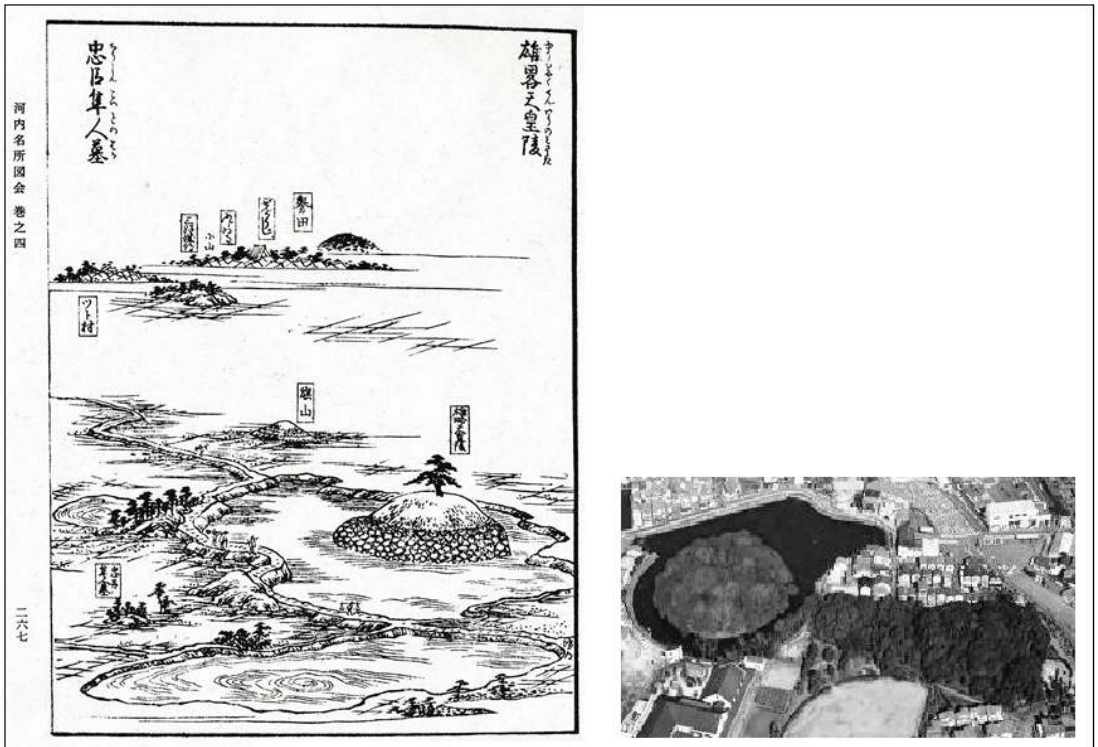
播磨の志自牟の家でのオケ・ヲケの発見

★以上のことから推測できることは、やはり清寧は宮中や墳墓での祭祀などの大王としての行為をすることができなかったことである。清寧の生存中か没後かはわからないが、飯豊皇女が臨時の大王として諸祭祀の主になっていて、そのようなときに播磨でオケ・ヲケが見つかった。２皇子の大王位の譲り合いの結果、「**播磨で発見されたときの功績は弟にある。**」と語った兄の言葉よりヲケ（顕宗天皇）が即位したことになっている。顕宗の宮・近つ飛鳥の八釣宮は渡来系氏族の地盤である。履中の孫が大王の位に就いたことより、渡来系王統がついに復活したのである。そして難波小野王（磐城王の孫）を皇后としたことになっている。日本書紀には磐城王は允恭の子とするが、允恭紀にはそのような皇子は記されてないのに、なぜ允恭の子としたのか理解できない。磐城王については謎としておく。

③顕宗天皇による雄略陵の破壊

★顕宗は、まず父の市辺押磐皇子の遺骨を探す。近江の置目という老婆から亡き骸を埋めたところ聞き出す。そして、遺体を掘り起こして蚊屋野の傍に陵を造り遺骨を納め、父王殺害に加担した韓袋の子孫を陵戸の選民とする。さらに顕宗は雄略に対する復讐の思いを強くし、宮殿の宴会の席で「**雄略の墓を壊して遺骨を砕いて投げ散らしたい**」と語る。

日本書紀では兄のオケは嘆いて他の臣たちとともに「仇とはいっても一度大王となったものの墓を壊すなどは大王のすることではない。」として必死に諫める。その結果、顕宗は墓の破壊を止めたと記す。



【図９】雄略陵江戸時代絵図と現在の航空写真

しかし古事記では、顕宗の代わりにオケが壊すに行って墓の傍の土を少しばかり取ってきたことになっている。墓を壊さなかったことに不満を述べた顕宗に対してオケが説得する。「父の仇の魂に報いるのは当然なことだが、大大泊瀬天皇は私たち兄弟の大従妹にもあたり天下を治められた方でもあります。恨みばかりにとらわれていては、後世の人にそしりを受けます。それで陵の傍から少しの土を取ってきたのです。これだけでも恥を与えたことになり、後世の人に志を示すには十分でしょう。」そして顕宗を納得したことになっている。

しかし土を取っただけではなく実際には雄略陵は壊されたのである。

上の図 9 は江戸時代の雄略陵図と現在の雄略陵の画像である。江戸時代には完全な円墳であった。明治になり前方後円墳にするため、大規模な土木工事がなされたが、それでも完全な前方後円墳にすることができなかったとのことである。

★天皇陵は全て前方後円墳として築造されたはずである。しかし雄略陵は円墳になっている。つまり、雄略陵は前方部が壊されたのである。記紀では顕宗は壊すのを止めたと記すが、顕宗は雄略陵を壊したのである。しかし記紀では、大王としてあるまじき顕宗の行為を記載することはできないため、「陵を壊そうとしたが説得されて止めた。」と歪曲したと推察できる。実際の顕宗の破壊行為は多くの氏族や民からそしりを受けることとなり、顕宗・仁賢は氏族たちの支持を失い、その後の政変と大伴金村らによる継体擁立になったと、筆者は推測している。これについて次節で詳しく解説する。

(2) 両王統の終焉

①仁賢即位の謎

★顕宗の皇后であった難波小野王が、仁賢の皇太子であったオケ（仁賢）に対して無礼な行為をした。それで仁賢が即位してから自殺したとする不可解な記載がある。無礼であっただけで自殺することなど考え難い。皇后の難波小野王は「難波」という語がつくことからも雄略に恨みを持つ渡来系王の血を引く女性だった可能性がある。これについては、筆者にはわからない。

ところで、記紀のどちらでも顕宗の死因は記されていない。古事記では在位８年（38 歳）で、日本書紀では在位３年で崩じたと記す。そして兄のオケ（仁賢天皇）が石上の広高宮で即位する。

★その仁賢については、以外なことに、古事記では妃と皇子皇女のみが記されているだけで事績は全くなく、在位年数も陵も記されていない。顕宗記は在位年も陵も記されていて事績も詳しく記されているのに対して、仁賢記は全く不可解である。（武烈記には陵と在位年数が記されていて、日本書紀でも仁賢紀には、古事記と同様に事績が全く無い。妃と 7 人の子女および在位 11 年で陵は埴生坂本陵と記すだけである。武烈＝仁賢やヲケ＝オケの説もある。これについては、後に詳しく検証する。

そして、仁賢没後、春日大娘皇女（雄略の皇女）との第６子（古事記では第５子）である小泊瀬稚鷦鷯皇子（武烈天皇）が即位したことになっている。

（注：日本書紀のこの顕宗３年、仁賢在位 11 年は、雄略 479 年没と継体 506 年即位に年を合わるため、逆算して記されたものと考えられる。）

★顕宗・仁賢から武烈について、隠されたことがあるのは明白である。これについて、考察していくことにする。

②平群の真鳥と鮪の謀殺の謎

★清寧から顕宗・仁賢時代には、平群氏の真鳥と鮪の誅殺のことが記されている。

≪古事記では≫

鮪のことを「朝廷の全ての役人は、朝は朝廷に出向くが昼は鮪の家に集まる。」とあり、２皇子を無視する悪臣として記されている。ヲケがまだ即位しないとき菟田の首の娘のことで鮪と歌垣で争ったあと、兄弟で謀って鮪を殺したことになっている。

≪一方日本書紀では≫

仁賢の後の武烈紀になって、ようやく真鳥と鮪の親子が登場する。真鳥が「国政をほしいままにして日本の国王になろうとした。」と記す。そしてまず、鮪が殺される。武烈が物部麁鹿火の娘影姫を娶ろうとしたが、鮪は既に影姫と通じていたので、武烈は怒って大伴金村連と謀って鮪を平城山で殺したと記す。その後、大伴金村が鮪の父の真鳥大臣を討つことを進言して、大伴金村は軍の大将となって真鳥の家を取り囲み火をかけて焼き払い真鳥は殺されたことになっている。

★このように、記と紀ではかなり異なった記述になっている。日本書紀では真鳥は雄略天皇のときに大臣になったと記されているのに、一世代以上後の武烈紀に登場することは明らかに虚偽である。ただし、鮪の謀殺は記と紀のどちらでも記されていて事実であったと考えられる。また平群の真鳥と鮪の謀殺に隠されたことは何か、なぜ顕宗・仁賢が短命で終わったのか、その答を述べる前に、仁賢の子とされる武烈天皇について考察する。

③武烈天皇は非存在

（ア）武烈の和名の「小長谷若雀」は、雄略の「大長谷」と仁徳の「大雀」の「大」を除いて合わせたものになっていて実在が疑われる。

（イ）日本書紀では、妊婦の腹を裂いて胎児を見たり、人を木に登らせて弓で射落として喜んだり、日夜後宮の女と酒のおぼれ錦の織物を褥としたり、殷の紂王のような「悪逆非道の天皇」として記されている。武烈で王統が終わるということを示すための創作であろう。一方、古事記ではそのような記載は全くなく小長谷部を設けたことと日嗣の御子がいなかっただけを記す。

（ウ）古事記では武烈の妃が記されていない。一方、在位年数と陵は、仁賢には記されていないのに、武烈には記されている。しかもどちらも顕宗と同じで、在位 8 年、片岡石坏の岡と記す。これは不可解である。なぜ武烈の在位年と陵が顕宗と同じなのか。

（エ）古事記には記されていない武烈の妃は日本書紀で記されている。武烈は「春日娘子」を皇后としたと記す。ところがこの「春日娘子」は母である仁賢の皇后「春日大娘」と同一人物のような名前になっている。

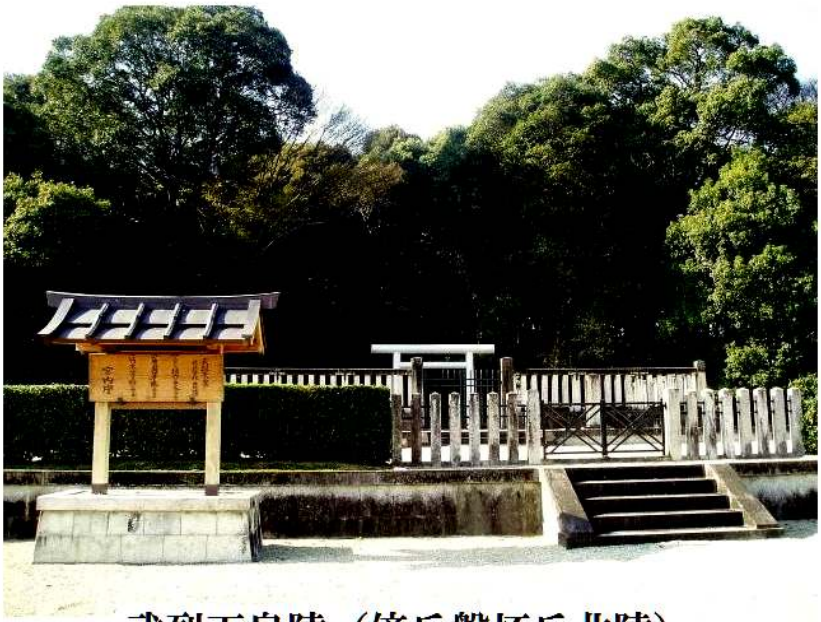
（オ）**一方で、古事記には記されている武烈の陵は、**日本書紀には記されていない。（ちなみに、古事記に記す片岡の石坏陵は、宮内庁管理の現武烈陵は自然の丘陵で前方後円墳ではない。）

このように、古事記では武烈の陵と在位年数は顕宗と同じで、

日本書紀では、武烈の妃は仁賢と同じになっている。

（カ）武烈非存在の決定的な根拠は武烈の年齢である。武烈の父である仁賢が、春日大娘を皇后として娶ったのは、播磨からヤマトに迎えられた以降である。古事記では、清寧歿後に、オケ・ヲケが見つかったことになっている。雄略没が 489 年、武烈は第 5 子である。よって武烈の誕生は 495 年以降になり、即位のとき（498 年）の武烈の年齢は、3 歳に満たないことになる。

日本書紀ではその矛盾を打ち消すために、雄略没を古事記より 10 年前の 479 年として、オケ・ヲケの発見も清寧の生存中としている。それでも仁賢が、春日大娘を妃として娶ったのは　清寧歿後、仁賢が皇太子となった 482 年であり、武烈は第六子なので、武烈の誕生は早くても 490 年ころ以降になる。武烈即位は仁賢没の 498 年であるから、仁賢が没したときはまだ 10 歳にも満たなかったことになる。武烈を即位以前から大人として記している日本書紀の記述も武烈の年齢矛盾は解消されていない。



武烈天皇陵（傍丘磐坏丘北陵）

★以上のことより、武烈（小長谷若雀）は実在しなかったことは明らかである。雄略と仁徳を合わせた名前より、王統が途絶えたことを示すために創作された大王なのである。
しかし謎はまだある。前に保留した顕宗・仁賢の死因と平群真鳥と鮪の誅殺事件のことである。

【筆者の推理】

④平群氏は、顕宗・仁賢を支える氏族だった

★日本書紀では「鮪が国政をほしいままにした。」「真鳥が日本の王になろうとした。」と記されているが、事実とは到底思われない。後の蘇我入鹿が悪者にされているのと同様に、鮪や真鳥は敗者になったので悪者として記されたのである。日本においては平群氏に限らずどのような氏族でも一族の繁栄のために活動するのであって大王位を簒奪するようなことはするはずがない。後の蘇我氏や藤原氏でさえ大王位になることはしていない。
倭王になる資格としては血統が重要である。清寧天皇の後に日嗣の御子を捜し求めたことからも理解できる。継体天皇が即位できたのも先祖の応神天皇の血を引いていたからである。
ではなぜ真鳥や鮪が悪人とされて殺されることとなったのか、筆者の推理を述べていく。

★平群氏は葛城氏と同様、先祖を武内宿禰とする渡来系氏族である。真鳥が「太子オケのために宮を造った」と記すことからも、むしろ**顕宗と仁賢を支える立場**にいたと考えられる。オケ、ヲケを播磨で発見した小楯は山部氏の祖で、その山部氏の本拠地の斑鳩は平群氏の本拠地の平群町の隣である。ヲケ、オケを迎えることを主導したのは平群氏だったのである。清寧後に大王位継承者のヲケ、オケを迎えることには全ての氏族は同意したのであろう。しかし大伴氏や物部氏らの天照系の氏族は、雄略陵を破壊する行為を行ったヲケ（顕宗）とオケ（仁賢）を見限り、代わり天照系のヲホドを迎えようとしていたと推測する。そして仁賢をあくまでも支えようとした平群氏は大伴氏と対立していたと考えられる。そのことは日本書紀の記述からもわかる。武烈紀には、平群真鳥が殺されるときに、広い海に呪いをかけたことが次のように記されている。

「敦賀の海の潮だけを忘れていて呪いをかけなかった。そのため敦賀の塩だけは天皇の御食用に使われたが、他の塩は天皇の忌まれるところとなった。」

★敦賀はヲホドが居た越の中心地＝元ホムタワケの本拠地である。つまり、真鳥は大伴金村がヲホドを越（敦賀の近く）から迎えることを知っていてそれに反対していたことになる。ただ、平群真鳥は雄略時代に大臣とさって活躍した人物で一世代前の人物である。よって、この日本書紀の記述は後世の潤色である。しかし、平群氏がヲホドの擁立に反対して大伴氏と対立していたことは伝承されていたと考えられる。

★次に、**真鳥の子の鮪の誅殺**について考察する。鮪の誅殺の時期は記紀で異なるが、ともに類似の内容になっていることから、この時期に実際に起きた事件であるのは間違いないだろう。記紀ではどちらも女性の取り合いが殺害の誘因になっているが、政治的対立が原因であると考えられる。古事記では、顕宗が即位する前に鮪の誅殺が記されているが、播磨から迎えられた直後にヲケとオケが軍を率いて有力氏族の鮪を殺すようなことは考え難い。鮪の殺害はむしろ日本書紀が記すように、ヲホドを越から迎える直前の事件であったとするほうが合理的である。つまり仁賢を支持してヲホド擁立に反対していた平群鮪が大伴金村に敗北したことが、鮪の誅殺として記されたと推測できる。

★日本書紀における武烈即位以前の記事を要約すると次のようなことである。

武烈が物部麁鹿火の娘影姫を娶ろうとしたところ、鮪は既に影姫と通じていたので武烈は怒って大伴金村と謀って鮪を平城山で殺す。そしてその直後、大伴金村は軍の大将となって真鳥の家に火をかけて焼き払い真鳥は殺された。

真鳥の父の木菟宿禰は 400 年～440 年ころの応神～履中時代に活躍している。その子の真鳥はその後の雄略大王のときに大臣になっているが、継体大王即位直前の 500 年頃まで生存していたとは考え難い。この時期の平群氏の長は真鳥の子の鮪であり、**武烈紀に真鳥が現れることは事実とは考えられない。**

★日本書紀は、なぜ前世代の真鳥を登場させたのだろうか。鮪が殺された後、焼き殺された人物がいたとすれば、それは真鳥ではない。では殺されたのはだれか、それは仁賢大王であったと考える事が最も説明がつく。つまり日本書紀では、**仁賢殺しを隠すために真鳥殺しを造作**したと、筆者は考えるのである。また、古事記においても家を取り囲んで鮪を殺したと記している。つまり、古事記の鮪の殺害も日本書紀の真鳥の殺害と同様に、仁賢の殺害を隠すために創作されたと考えられる。さらに、武烈を創作した理由も、悪逆非道の大王として描き、王統の終焉であることを示すためだったが、それだけではない。仁賢殺害を隠すためも創作の理由と筆者は考える。というのは、古事記では武烈を悪大王とは記しておらず、仁賢記と武烈記の内容は類似しており、武烈は仁賢の影のように感じられるからである。

≪顕宗と仁賢は兄弟ではなく、同一人物か？≫

★もうひとつ顕宗と仁賢について、若干の謎が残っているの。それは、顕宗（ヲケ）と仁賢（オケ）を兄弟とすることは造作されたものであり、実際は同一人物であったかもしれないという疑いである。そこで、古事記と日本書紀での、宮、陵、在位年を表に示す。

		顕宗天皇	仁賢天皇	武烈天皇
古事記	宮の地	近つ飛鳥 の宮（河内）	石上 広高宮	長谷列木宮（ヤマト）
	陵の地	**片岡石坏の岡の上** （奈良香芝市）		**片岡石坏の岡** （香芝市）
	在位年数	**八年** （38 歳）		**八年**
日本書紀	宮の地	近つ飛鳥の 八釣宮	石上 広高宮	泊瀬列城宮（ヤマト）
	陵の地		埴生坂本陵 （南河内）	
	在位年数	三年	十一年（己卯＊ 498 年没）	八年（506 年没）

★疑問点は次のようなことである。

（ア） 兄のオケ（仁賢）が皇太子となったのに弟のヲケが先に即位したこと。

（イ） 弟のヲケ（顕宗）には皇后の他に妃がおらず、子女もいなかったと記す。皇后の難波小野王は允恭の孫の磐城王（雄略と吉備の稚姫の長男）の孫とされるが、雄略記には記されていない。

（ウ） 仁賢に対しては、日本書紀において「聖明で徳があり」「敏才・聡明」「めぐみ深く穏やか」などの多くの賛辞を記している。これに対して弟の顕宗に対しては何の評価もしていない。

（エ） 古事記では、顕宗記は極めて詳しいが、仁賢について妃と皇子皇女のみが記されているだけである。仁賢記と武烈記は字数が共に事績がなく、極めて簡潔な記述である。

（オ） 古事記では、顕宗と武烈には在位年数が記されているのに、仁賢だけが在位年数が記されていない。

（カ） 顕宗の宮は河内であるのに、陵は武烈と同じ片岡石坏の岡の上（香芝市）である。また仁賢についても、宮が石上広高宮であるのに、陵が河内の埴生坂本陵である。顕宗と仁賢の陵は、<u>互いに宮と逆の地</u>になっていて、不可解である。

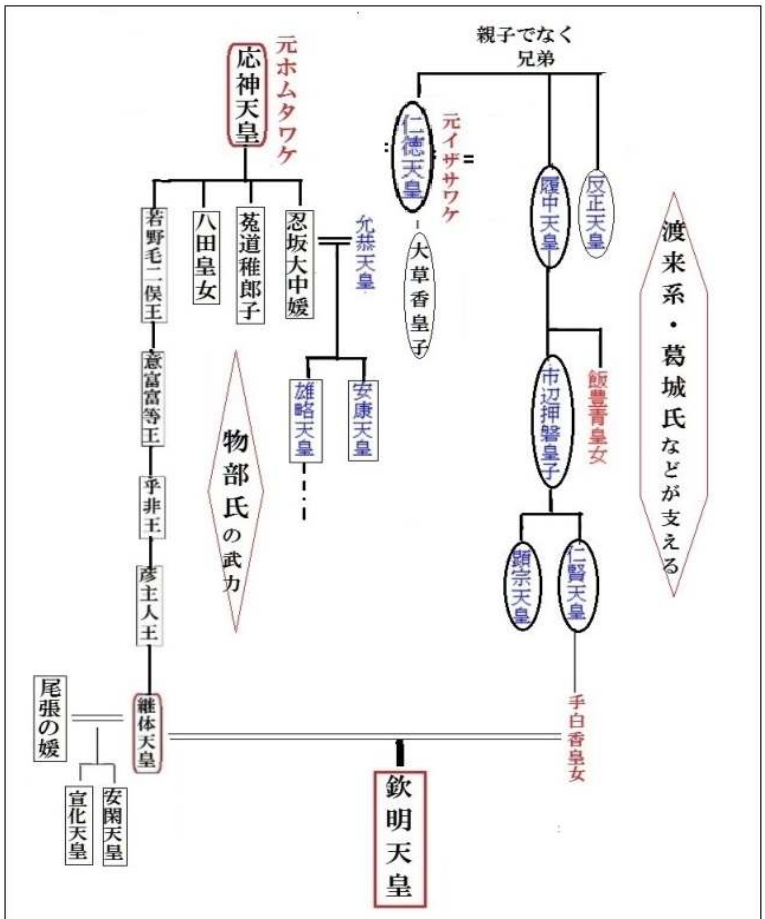
★筆者は、オケ（仁賢）とヲケは同一人物である可能性もある。一人の人物を二人の兄弟として創作したとの仮説である。その理由として考えられるのは、雄略陵の破壊のことである。実際は、顕宗＝仁賢が雄略陵は破壊したのであるが、そのようなものは大王として

認めることができなかった。雄略陵の破壊行為を実施しようとしたのを顕宗に押し付けて、仁賢を、破壊を阻止した兄として創作したということである。ただ、この説は筆者の中で確定しているわけではなく、やはり顕宗・仁賢は兄弟であった可能性が高いと考えている。

（3）継体天皇の擁立

★平群氏を滅ぼして仁賢を焼き殺した大伴金村は継体天皇を即位させた。日本書紀ではヲホドのことが詳細に記されている。ヲホドの父である彦主人王が近江高島郡三尾の別邸にいたとき、実家の坂井郡高向で容姿端麗の振姫を娶り、三国でヲホドが生まれたとする。

★大伴金村はまず仲哀の子孫の倭彦を迎えようとするが、倭彦は兵を見て恐怖して遁走したので、金村はヲホドを推挙する。**物部麁鹿火**や**巨勢男人**も賛成して、氏族たちが三国へ迎えに行く。ヲホドも初めは疑っていたが、河内の馬飼首の助言により決意し、**交野の葛葉の宮**で即位する。ところで継体天皇は越の国から来た新王朝とする説を唱える専門家が多い。しかし、<u>血の繋がりがないものが倭の大王になれるはずがない</u>。渡来系の元イザサワケでさえ、名前の交換により倭王の資格を得てようやく認められたのである。ヲホドも応神天皇の子孫の貴種でなければ多くの氏族から大王として認められるはずがなかったのである。



【図９】筆者の説に基く大王の系譜

★そして、前回で述べたように、ヲホド（継体）の五代先祖とする応神天皇は、渡来系大王である神功皇后の子ではなく、垂仁の皇子である天照系の元ホムタワケであった。元ホムタワケの本拠地で代々越の首長として血筋をつないでいたのである。そのヲホドの情報は天照系の氏族である大伴氏は全て把握していたのであろう。葛城氏や平群氏が仁徳や履中の血を引く顕宗（仁賢）を自分たちの主君としたように、神武＝崇神の血を引くヲホドは大伴氏にとっては「主君＝我が君」だったのである。そしてヲホドを擁立した大伴金村は、同じ天照系の雄略時代に大伴室屋が大連として権力を持ったように、大連として大きな権力を持つようになったのである。しかし継体の晩年には金村は失脚することになり、蘇我氏が台頭する。継体の没後、天照系の継体を父とし, 渡来系の手白香皇女を母とする欽明が即位して、百年以上争ってきた二王統が統合されることになったのである。その欽明時代から倭国は新たな時代を迎えることになる。蘇我氏と物部氏の二大氏族が大きな力を持つようになり、百済との強固な同盟は、暦・仏教・漢字など多くの文化が伝えられた。「欽明」という漢名もそのことを意味していて、まさに古代の文明開化時代といえるのである。**最後に応神から欽明までの筆者の説に基づく大王系譜を図９に示しておく。**

【終わりに】

★今回も**記紀に隠された**多くのことを見出すことになった。記紀の記述を無批判に受け入れることでは古代の真実は明らかにすることはできない。今回の筆者説は次のようなことである。これらは決して思いつきの推測ではなく、本文で述べているように、全てに多くの根拠があることである。

①履中や反正は仁徳の子ではなく兄弟であった。

②倭の五王のうち、讃は仁徳（名前の交換後のホムタワケ）であり、珍は履中時代に河内を統治していた反正（ミズハワケ）であった。

③倭王の済＝允恭（雄朝津間稚子宿禰）は仁徳と血縁がない渡来系の人物であった。

④允恭時代から雄略時代にかけてのすさまじい大王位をめぐる殺戮戦は、天照系と渡来系の戦いであった。

⑤允恭の子とされる９人の子女のうち、木梨軽皇子・長田大娘皇女・境黒彦皇子・軽大娘皇女・八釣白彦皇子は、皇后の忍坂大中姫との子ではない。安康・雄略は

⑥雄略没後、播磨から迎えられたオケ（仁賢）・ヲケ（顕宗）は父（市辺押磐皇子）の仇である雄略の陵を破壊した。

⑦仁賢の子とされる武烈は非存在である。平群真鳥が焼き殺されたという記事は、仁賢が焼き殺されたことを隠すために創作されたものである。

★これまで３回にわたり、ヤマト王権の推移について述べてきた。次回は時代をさらに遡り「天孫降臨と神武東征」について、詳しく検証する。

了